

今回は山本幸三衆議院議員が 10 年前から予算委員会にて、今のアベノミクスと同じ日本経済再生論を説き、日銀の速水、福井、白川総裁相手に激しい論戦を続けた記録「日銀によってつぶされた日本経済」を題材に書きたかったのですが、たまたま文芸春秋 5 月号に藤原正彦氏と浜田宏一教授の対談を見つけたので、それを読んだ感想を書いてみました。

安倍政権が発足してからまだ 3 カ月余り、具体的な事はまだはっきりと見えていないのに、株や為替もリーマンショック前の水準まで奇跡的な好転を致しております。なぜ日本は 15 年間もデフレ不況に喘いで来たのかと思わずため息の出る思いであります。

私は藤原正彦氏の「国家の品格」を読んで以来この人の考え方に傾倒いたして参りました。蛇足ではありますが、お母さんの藤原ていさんの「流れる星は生きている」は戦後、間もなく読みました。お父さんの新田次郎さんの「富士山頂」「アラスカ物語」は青年の頃に出会いました。

藤原正彦氏とは昨年、ある団体の組織の大会へと「記念講演」に来て下さり、お会いする好運に恵まれました。この頃から藤原氏は「日本の不況は財務省、財界政治の責任よりも日銀にある。インフレを恐れる余りデフレ不況を 10 数年も放置してきた責任の大半は日銀である。

リーマンショック以後アメリカは通貨供給量を 3 倍に増やし、英中韓国等主要国はみな猛烈に紙幣を増刷して景気を刺激し、人々を心理的にも向上させてきたのに反し、日銀はインフレを恐れ、供給は微増させたのみで傍観を続けた結果、世界の通貨のバランスが崩れ、円はドル、ユーロ、ウォンに対して 30% ~ 40% も高くなり、エルピーダメモリ、パナソニックもソニーもシャープも皆日銀によって潰された様なものでした。

日銀の速水、福井、白川総裁と代々「金融政策はデフレに無力だ」との論理が主流であったからであります。

かつて 80 年前世界大恐慌の折、高橋是清蔵相は金利を抑え、貨幣を大量に供給し、世界で一番早く大恐慌から日本を脱出させました。インフレ 2%、成長率 7% という日本の経済史上に残る快挙をなぜ学ばなかったのかとの思いが残ります。

現在の経済はとかく机上の IT に答えを求めすぎます。もっと歴史、経験に教わり生かすべきであります。

小泉構造改革は大企業、大型店優先の論理でもあります。終身雇用、年功序列を廃止し、非正規雇用を拡大しすぎたために、世界で最も安定した日本の雇用制度を壊してしまいました。結果として日本の経済を支えてきた中小企業を潰滅させ、若者たちは定職を持たない、家庭も子供も作れない少子高齢化、デフレ不況と言う暗い社会を作ってしまいました。この様な負の遺産を是非安倍政権を安定させ、アベノミクスによって一掃したいものです。

藤原正彦氏は数学者も経済人も情緒感を失ってはいけない、俳句心を常に持って想像力、創造力を持つことがなければ心豊かな社会は生まれません。そのためにも TPP によって世界で最も美しいと言われる日本の田園風景を失ってはならない。

日本の田園風景は四季の移り変わりがあり、日本人の美的感受性の源泉だからでありますと説いて居ります。

文芸春秋 5 月号参照